英国奇談堅琴草紙 全篇脚色

まづ全篇の貫目を英国まで有名の王アルフレッドの傳記にて之を修飾を加へたるものなり

初め英国の王エゼルレッドの頃ガスラムといふる海賊いつて英国を侵せしかばエゼルレッドは其弟アルフレッドと共に出馬をして之を防ぎ却て大賞を取りしが父折好くアルフレッドの接を逢ひ且つスライといふ雑兵の注進まて賊将ガスラムを討取り首を斬りしかば事やうやく鎮まりぬ

（以上一篇の骨子）然るに其後一二年間は戦後の疲弊いまだ去らず国に饑饉疫病続きて人の死ぬ事無数なればエゼルレッド王は大に胸を悩まし遂に高き病を生じ之が為め命を終られぬ助け弟アルフレッドが其位を継ぎて王となりぬ是より幾程もなきに賊将ガスラムが俄に攻来りしといふ風聞盛なるにアルフレッドは怪みて人をして其虚実を探らせまるに幸にも此風聞は真実にて前の戦に討取りしガスラムは見れ贋物にて真のガスラムなりしかば事不意に出でしかば国中は忽ち乱れ殊にエドマンドといふ人が守りしる城の如きも真先に攻められつエドマンドは討死せり其妻トマサ子エモリ娘メリーなどは城を出でて逃行けり途中まで追兵に追はれトマサは殺されたれども従ひたりしサムスンといふ若き人と二人の子は殺されじと一生懸命防ぎたれども敵は無数の事なればサムスンも防ぎかねて遂にや二人の内一人も殺されつ〻ありしが幸なるかな一羽の大鷲来りてエモリを掴み去るといふ姉のメリーは左の側の海に身を投じたるサムスンも行方知れざりしが（以上の辺は甚だ面白き処なり）されば又アルフレッド王は頻に兵を集めて敵を防ぎたれども遂に力尽きまされば詮方なく将士と談合をし一先帝都を立去りて賊の英気を避けて後不意に起つて敵を討つ事に決し将士を解散せしめ身は疎末なる衣服を着し常人の体にて打扮ち一人の臣下を連れて都を落ちぬる半開の家に立寄りて身を隠せり此家は是れサムスンの家にて甚面白き話話ありしが前にも見えたるスライといふ雑兵は敵よりの間諜と見られしかば此頃もアルフレッドが所在を尋回りて遂に此処にアルフレッドが在るを知りて之をガスラムに訴へて無数の人を捕りて石牢に入れまたり話ありつ〻暴にて鷲に掴まれ去りて〻エモリを鷲のありける里の大なる欄

なりし辣那も極めて猛き賊にて一千餘人を配下に有ち近海に航行まして不法を所業に行ひ其勢猖獗なれば国王も之を制ち叵く其為に所を任ちより辣那愈勢附き遂に法朗西に乱入ちて毒〻鹵掠を行ひ数艘の船に臓物を溢るばかり積載せて故郷に帰る途次俄に颶風に遮られ船々悉壊られて身単〻にて免れつ那千波蘭の海岸に辛〻漂着ちより里の家に押入りて金銀衣裳を奪ひつばやげて那千波蘭なる領主葉拉に捕へられ蛇責にして殺されにけりかどに枯樹嵐も已が父積悪を報果まてかくしとも毫だに思はで耳々平常英倫の国富をうと聞くもちら〻争之に侵入ちて随意に物を掠奪ち機好なれば全国をも渾べて全く掌握ち之が王ともなりちんと最浅はるも心を決め絳の便宜を俟つかどに此賊悪運強きもちらさせる故とて有らざれども新に配下に加ちる者逐年に増加ちつ枯樹嵐三十歳になれる時即八百六十七年十一月ち末に至りて新旧

併せて四千に餘りやうや〻盛になるもちら〻枯樹嵐心に喜びつ今はも心安らいでや日来より思ひ〻る心の望て果たんずとやげて配下を召集めて思ふ處を説示ち翌年ち六月に英倫に進發ち那千波蘭には怨も有れば先是より屠るべ〻など嚴に順序を定め準備何呉と無く為て程に早くも年を過行きて瞬く間に春も過ぎ五月の末となりぬればやげて英倫を指ちて出帆ま其先鋒々枯樹嵐が弟なりける行髪四艘の船を率ゐて後勢々則首領枯樹嵐船六艘を率ゐる毎艘兵卒四十名各剣戟を持ち〻順風に乗ち〻駛せつ思ふよりは早く来て其月廿六日小那千波蘭に到着ち新城に陣を占め勢猛く攻入りて當るに任せ乱暴ち猖獗最も極まりたれば此時領主なる葉拉々先敵物故りて其後を継ぐ子無ければ馬沙の領主覇列が假に此国をも統轄ちて一人の鎮将をば置きしに今枯樹嵐が攻来れる事急にして意外に杜り遮莫命を君より受けて其任に當まれば何

猶豫の有るべきぞ賊来りぬと聞くとも直に起ちて兵を集へ簇る枯樹嵐の軍

猶豫の有るべきぞ賊來りぬと聞くとうも直ぐに起ちて兵て集へ簇る枯樹嵐の軍く
當り必死と為りて防ぐとも倉卒なれば事齟齬をて戦ふ毎ふ敗て取を終ふ精力
盡果て其侭逃亡をるるよう那个波蘭一国やまぐく枯樹嵐の手ふ陷り勢い
よく振ふるぞ今や南ふ軍て進め馬沙て畧くまく欲する由覇列ふ聞えつバ一
度ちくに二度までも駭呆れく分く由無く奈何ふ為まと案せつども好手段
とて有らぐれば乃事ふ顛末てぞ威塞ふ在まる葉策列王ふ具申をつ援兵
て求めうきれば英王葉策列も此頃国中穏ちぬ風聞て聞きく上ふ今又覇
列が具申を得て愈心て悩みつ諸臣と偕ふ評議ひれども皆倉卒ふ驚くちて
只黙然ちるちをれば葉策列も止むて得ず使者て走らせ弟ちる亞弗列て召く
なるひ枯樹嵐俄く攻来りて那个波蘭て奪略をるもや馬沙て侵さんと圖れる事
ふ李末て溺ふて事無く告ずて郷ふ意見甚麽ぞや思ふ處て述べぬと思へ

つてぞ問ひるふ此時亜弗列ぞ齢廿の上ふ上らねども仆き時父王なる葉策
幹く隨ひく當時人文の淵叢なる羅馬ふ遊學をぬ以文武二道て研究を傍堅
琴て奏づるも其奥妙て究めくちう物て視るふ明察て事て為をふ麽乱て
効さぬ古今無双の君なれば聞くと齊く旦憂ひ旦憤慨ふ堪てられず容て改め對ふ
るもう洵ふ不慮の珍事なれば手て着くる術無きて理有るべき事なく尺寸ふ木
も長ぜれば斧柯て用うる患て為をと古語ふも曰ふ候と雖やさらて況んや申さ
んや彼の枯樹嵐や勍敵なう尺寸ふ木の類ふ以て此侭て捨置りぞ一ぞ万貳の
大患ふて一ぞ国威の汚辱なるふ黙々として誰ふも止まん所詮他人て擇まんふ唯
討伐の責任てぞ亜弗列く命ぜられふ弱輩なれども葉波多ふ王の孫ふ列る身
なう不肖なれども人なるもふ義務と職務の二ぞ知りつ愛国の剣て打揮ひ公道
の楯て携てく一心籠めく向ふんふ克なぐる事や候べきと憚る色無く申さぞ

葉策列て横手て拍ち勇ち亜弗列朕もさぞは思ふ為業ふ郷の同

の櫓と携へ〻一心籠め〻向ちんは克なぎる事や候ふべきと憚る色無く申さるる

葉策烈も横手を拍ち勇み〻て哉亞弗烈殿もさこそは思ふられ業は郷の同意を得たるは今更遅々たる所には朕も郷と馬を並べ進ん〻馬沙の方は至り覇烈なれども相助け〻賊が首領を獲つべきはとて軈て亜弗烈は暇を賜ひ〻退りし更に有司に命令を親征の準備を為さしめつ猶晝夜の差別無く亜弗烈を初として諸臣を集め評議を凝らせば賊兵内地に入らざる前に逆撃せんと云ふに外は策畧も有らざるを愈親征の日を急ぎ召に応じて集まりたる兵卒の数を数ふるに無慮七千有餘なれば迚之を三分し歩騎三千を以て兵馬の主司なる雷決に委任し曄門度と云ふ者と共に威塞を戍らしめ騎兵六百と歩兵四百とを率ゐ〻一千の兵卒を以て亜弗烈は引卒させ葉策烈は歩騎を以て三千を引卒し六月十二日の黎明に威塞を出發し馬沙を指して行く程に十五日の昧爽に既に馬沙の国中なる履雪多きを来たるに程は馬沙の領主覇烈は這

四

回葉策烈兄弟がみづから救の為めとて来れる由を以て報知に因りて所知るもの大に悦び直に出でて之を迎へ迭に口誼を了へ後葉策烈を綿密に賊軍の挙動を探へば覇烈に問ひ〻るに出没不測なる由を以て切に已に屬する兵の数少きを許ふるを以て葉策烈を顧みて朕も素より然る事の有んも知れじと思ふたれども三千人を引卒して見たり一千人を割きて和殿に分与せ〻とて分与するに覇烈は愈喜び今を臣等の卒ゆる兵を以て一千五百を超えれば早心安く候ふと禮を白を折るもいれ暴に亜弗烈が散布せし斥候の一人が馳来りて亜弗勒に白を云う曰少を具に候ふに凡三百餘人なるを以て賊の一軍五四川より茨里城に乱入を見る城を奪ひ〻て直に我軍に背後に出で用意の為めに抑直に威塞の皇居を衝かん〻思ふや近郷の農家を劫を以て粮を収めた候ふと云ふ間もなく自餘の斥候数名も同じく馳来りて注進を為る事の趣都て異なる処無ければ威唯呆

る様にて頓に思案も出でざるし中まて独亜弗烈は且歎ぎ且勇み〻洵に出没不測

片候ち数名も同〳〵馳来りて注進ちぬる事の趣都て〳〵異なる処無ければ咸唯呆

るちらうて頓て思案も出でざりし中まて独亜弗烈て且歎ぎ且勇こ洞て出没不測の名ち虚言なるぬハ今こそ知りれ顧ま件ち枯樹嵐て愈尋常の賊ちぐ心大志ち懐ぐるちん其て兎も角も今爰ヨ黙然とて駐まるハ勇無きち似たるちこちに忌々ちき大事ちんも知れねば是ちう臣等ち引却ち茨里城ち馳向ひ勢力全〳〵ざる前て其賊隊て急撃ち後の患て除きてん争許さるるもしと最勇ま〳〵も宜ふち葉策列も沉吟ち折反ちうと思一ども已ち茨里て略されれて亦恐ち迄き賊ちるて他人ち委ねる〳〵敗られなば愈彼ち勢附きて後悔きるとも及ばじと速く心て決せりぞ然らば郷て煩てきん疾く撃破まるもしと許ちぬるち亜弗烈て拜謝ちて別て告げ一千人て引卒ちて茨里の方一と急ぎ行く城下近く来て見れば賊て既ち兵粮て収了りしと覺ちて堅く城門て鎖固め只数十ち旗ちう風ち吹られ〳〵翻飜たれば亜弗烈て城外の平蕪ち馬て駐めさせ一名二名の斥候て放ち城中ち体

て探らちるる雲刺ちて帰来つ城中なる賊兵て如何ちる故ち影だち見えぬ窪寞とて音も無ちとっふち亜弗烈て怪こてそぞ不思議ちる事ちるる哉兎ま角も試んと云つ士卒ち令て傳へ稍城ち近づきて鯨波弋作る事三度ち及ぶど城ま賊の有りや無ちや愈寂然たるちこちなれば益こち疑ひ〳〵門打破り找入れば這て拾も甚麼城中ち賊一人も有らぢちて唯此處彼處の木幹ち旗て結ひのこちうちう是ちぬで士卒も再駭き偖て旨々欺られ〳〵ち鈍まりさとのと云ふちて亜弗烈も愈ち賊ち虚勢て迷てきれ益無く時て費ちもちち〳〵追究せんて易られど又兄王なる葉策列ち御身上さこ心元ち〳〵轉憂苦ち耐つぎれて兵卒們て也ち奬勵ち又も馬頭て北ち向け葉策列ち追及ぐんと頻ち急ぎぬひろ

第二回　勇少年孤軍急て救ふ　英国王一箭賊て斃ち

重ねて説く亜弗烈ち賊の欺く所とちし其原因て尋るち即是枯樹嵐ち遠慮の効

と重ねて説く亜弗烈が賊の欺く所となし其原因を尋ぬるに即是枯樹嵐が遠慮の効せる所なり初め英王葉策烈弟亜弗烈を伴ふて出馬せるに由聞らるる枯樹嵐太く便無く思ひ怎英王兄弟を分離させ遣はすべく策を得てりば配下に之を教つて三百人の兵をもて西川より茨里に入り農民の粟を掠取り之を隊糧と為す城に虚勢を赫うて直に海岸に進行き海を傳ふて忽ち威塞に攻入るべしと嚴く指揮をなす果たせる哉最容易く亜弗烈を欺得て謀りし如くなりしかばやがて軍を轉じて只一撃に葉策烈を撃破んと思ひつつ漸進軍する程に葉策烈も斥候より兵の報知に因りて早くも聞知り急ぎ諸隊を整へて進ぶべく行く事いまだ幾何もなくして只見る對向の方より来たる一隊の軍現出で烟嵐を捲て来る様問ふても著く賊なるやを彼こそ賊徒なれ望む所なもてきれば味方なり大勢なるを中割られば詮無うん兵隊伍を乱さずとて壍頭を差揃へ

粉微塵と迎撃つ這方をも葉策烈が訓諫を精兵なり那方も聞えず枯樹嵐に隷従ふる鋭兵なり成敗熟否を今日に在りと互に心を思ふもなく日来なりは勇氣も増る力も出で撓まで怯まず快黄昏に近づくども勝負更に決はねば葉策烈を焦燥ちつ騎なる馬も斃るる近に嘯叫んで戦ふるを枯樹嵐が左の一陣堪匝ねて頽立つを見るとも味方を勝に乗り尚奮ふる其折をも賊なる遊軍一千餘騎何時の程にか忍びん横方より葉策烈が麾下目掛けて突入り吐嗟とばかり不慮の事に駭きなるも葉策烈が将士を更なる雑兵なれば王撃なせどと雲時が程を防戦力を尽くれども味方を既に疲れるを賊を新兵なる勁騎なれば鋒尖強く勢猛く息でも揉立つれば瞬く隙に撃なる者いそうとふ数を知らざれば葉策烈王も今を覺悟を決めるに千騎なる残兵を奥鱗の備に立直る賊軍を引請々々必死となって戦ふるなる霸烈を又曝

英国王一箭賊を斃す

兵て奥鱗の備を立直る賊軍て引請々々必死となて戦ふもちゝ覇烈と又曩

ゝ程を賊ゝ後陣とゝゝいひ憶をて深入をゝゝゝて遠目をそれと葉策列ゝ危くはりしを見るとゝゝども引却をゝゝ暇もゝゝゝて心も空なる程ゝ賊の頭人枯樹嵐を此体裁ゝ力て得て忽士卒を下知て傳へ葉策列ゝちこゝゝて覇烈ゝ兵てさゝ十重二十重を圍こゝる最も危き極度なりゝゝる虜ゝ賊の軍中俄ゝ乱噪ゝ体まて敵来りぬと呼ゝる聲いと囂く聞えゝゝば其意て知ゝゝと葉策列も亦覇烈も心裡を五分ゝ勇を惹起ゝ尚一心を防ゝ程ゝ倏忽賊て驅散ゝし現出てゝる若武者ゝゝ今其人て名状ゝて爰を言ゝん但見る齢をせて超えて紅梅の頬臥蚕ゝ眉耳厚うゝゝ眼清ゝ唇丹うして歯皓うゝ頭をて紫銅重を銀の鈑打つゝる兜て戴き右手をて長剣て抜持ちゝる左手の方をて二尺ばかりゝ鋸鉄製ゝ楯て携へ太ゝ逞氣ゝる栗毛ゝ馬を泰然とて跨ゝれゝ其秀てゝる事言語を尽ゝゝゝゝて其雅ゝる事筆もて写ゝも難ゝるゝゝ正を是一個の美少年

天ゝゝ降りゝ地ゝゝ湧きしゝと思ふばかりの様ゝゝゝて葉策列も覇烈も均ゝ共を打驚き特を枯樹嵐ゝ兵や這て何漢とゝゝふのゝて茫然とて目戍まて在り當下若武者遠近て佶と瞻豆ゝて大音揚げ抑吾て誰とゝ為る當国英倫の人の王葉策列王ゝ次ゝ弟覇烈ゝゝて知ゝゝる向を料ゝゝて汝等ゝ謀言を誘ゝゝ茨里の城を向ひゝゝ城をや一人の賊も無ゝゝゝば欺ゝゝゝて悟るゝゝ兄王ゝ御身上も最最心元無ゝゝゝて直ゝ其處ゝゝ引却ゝ駝帰りゝる甲斐なゝて爰を泣まで得ゝゝしゝば偖こそ胆て潰れつゝめ寄せゝる其隊の頭人て枯樹嵐と見るゝ僻眼人今こそ現せ覇烈ゝ武勇ゝ程て受ゝゝも見ゝゝやと勢猛ゝ罵まて千人ばかりの手兵球前後を立ゝゝゝ馬を拍れ縱横無碍を馳回れて賊の軍勢飛駭き思ゝに其侭躊躇ゝて枯樹嵐て見て冷笑ひ扨て汝ゝ覇烈ゝ聞きゝを勝る敏捷さを遊莫士卒も少き唯一人の少年ゝゝて斃ゝを難き事やたゝる兵们猶豫ゝる事ゝと

葉策烈王が次男亜弗烈なるを知らざるべ向は料らざる汝等が謀計に誘はれ茨
里の城に向ひ〻城に一人の賊も無ければ欺られ〻と悟るもなほ凡王が御身上も最
最心元無けれど直に其處に引却き馳帰りなる甲斐なく疲に泣きて得わらし
らば偖こそ胆を潰れつゝめ寄せる其隊の頭人で枯樹嵐と見るべ僻眼此今こそ
現せ亜弗烈が武勇が程て受けるも見とゝと勢猛く罵りて千人むらの手兵球
前後に立ちゝ馬に拍れ縦横無碍に馳回れで賊の軍勢能駭き思ひに兵俱躊
躇ふて枯樹嵐を見て冷笑ひ扨て汝が亜弗烈に聞きて勝る敏捷さよ遽莫
士卒も少き唯一人の少年なるて斃なる難き事やなるる兵们猶豫なる事なと

山田羨妙堅琴草紙断片

本間文庫
文庫14
A35